

虚の符

洪水企画 2012.12.30

イカタ

http://www.kozui.net

3



いつか
また会おうね
風吹く丘で
きみのこと忘れない
忘れないから
ぼくのこと忘れないで
きみが握りしめていたもの
ぼくは知らないけれど
ちいさな小箱なら
いつしよに探しに行こうか
きみの手の中になにか
そこにしまっておけるように
嬉しかったよ
きみに会えた日
いつか、またきみに会える
その日までぼくを忘れないで
ああ、ぼくは風になつたけれど
きみは虹になつただろうか
(とおく、またとおくへ……)

風の丘 (Et j'irai loin, bien loin...)*

岩崎美弥子

絶え間なく、よどみなく、悠久の時のしじまを流れる谷川のほとり
夜の闇にひらめく漆黒のジャガーの 物言わぬひとみの奥へと
移りゆく二つの影 インディオとインディアの血を引く男と女
貸し出され 与えられた大地の上 熱い灰でできた寝台の上
円天井のように上っている樹々の根元
あらゆる悪も不平等も密売人の舌打ちも
バルサの木で造られた丸木船へと放つてしまつて
パンの笛と水の太鼓の音 鳴り響く 千年の祈りに耳傾けながら
髪 からませ 息 からませ 腕 からませ
やがて来る大洪水への予感を胸に秘めて
エワンタマの怒りが空と河川の堰を開け
宇宙を無に帰する前に
くちびるで反響する もつとも幸福なひとつの会話

* Rimbaud

Be - i n g

森山 恵

この細道を通り抜ければ
この急勾配を登り切ればと願うけれど
どの体も
どこまでも行つてもゆき止まり
わたし
曲がりくねつた坂道
その右手にはみどり色に漱んだ池
スキの翹がぼんやりと映る
左手には水神社の白い鳥居があつて
イチヨウの古木が色づいて
その先の大名屋敷跡には
花梨の実がぼとりぼとりと落ちる
わたしたち
空地の仔猫のしつぽは
ふいに途切れたまま
どこまで行つてもゆき止まり
樹の奥から現われた黒ねこ 一匹
も 同じしつぽ
闇が切れる
わたし
のぼり坂の半ば
根をむきだしに倒れる
靴を投げ出して
わたしはどこへも通じつかないB坂
体はどこでもゆき止まる
くねりくねつてそれでも昇り行く
わたしたち
つま先あがり昇りつめ
ゆき止まりしも B坂

世界の朝 神泉 薫

「なに考えてるの？」
——「なんにも」
つつしみ深く黙れよ
澄んだ空とざわめく葉ずれは静かに告げる
神聖な森の奥 光は光のまま 水は水のまま 原初の輝きに満ちて
吹きすさぶ風を道うものはいない
静寂をとがめる無為な雑音もない
吠猿の遠い鳴き声が切り拓く 秘境への入り口で
木霊のごとく轟く伝説の
黒と黄色の七面鳥が 雷鳴と稲妻に取り巻かれながら
山を割り 岩を割り 水を割り 新しい楽園へと羽ばたいてゆく時
誰もまぬかれることのない(人間はやつてきては去つてゆく)
運命のしなに深々と横たわる
二つの命 インディオとインディアの血を引く男と女
咽喉元から迸る 歓喜の母音の矢 打ち放ち
名前も ことばも 輪郭も失つて
真っ白に炎上する ただ一つの魂と化して
頭上に燦々と煌めく われわれの太陽を射抜くとき
寂しき孤児は もう存在しない
結ばれて在る水面は しずかだ
どこから産声
世界の朝を救う

※(へ)内引用は、ル・クレジオ著 菅啓次郎訳『歌の祭り』(岩波書店)、
他にも参照 引用した部分がある。ル・クレジオ著 菅野昭正訳『偶然
帆船アザールの冒険』(集英社)収録の小説、「アンゴリ・マリア」より、
参照 引用した部分がある。



拒否 平井達也

グラスにビールを注ごうとして
きよう言おうとして言えなかつた
言葉の重さ分くらい手元が狂う
ビールの泡がグラスからあふれる
テールが濡れ
言い出せなかつた言葉も湿る
伝えなかつた拒否の固さに見合うだけ
ものが変わるが遅れていく
ほどよく泡を立てるのは難しいのに
夜毎のビールの銘柄を変えるのは
失くした日記帳を本棚の裏に
探すくらいに勇気が要る
明日こそ言おう
鳥籠はとくに空っぽだ
ぜんまいを巻き直すみたいに
拒否すべきものを憎み直す
夜毎に飲んでるのは
あまり苦くないビール

朝の表情

小熊昭広

台風一過の青空の下
ゴミ袋を両手に掲げて
路地を歩いていると
べしんこになつた
白い鞋が道に横たわつていた
膨らんでいたであろう
ふつくりとしたお腹から
内臓が飛び出し
濡れて黒光りする
アスファルトの上で
白い死が輝いていた
これはゴミなのだろうか
ポイツと捨てられるべきもの
ではないのだろうか
きつと 時間とともに
消えてゆくものなのだろうか
何度も轆かれ
何度も薄つべらになり
何度も十からひ
風に掠られてゆく
そんな時間の先が
ぼんやりと見えてくる
なぜか とどき揺れる
腐臭が鼻を突いて
割れた空気のよう
そこを横切つた



étude 音楽 (2) 池田 康

ギター

螺子を回して強く張れば
弦は一つの語に自らを定め
隣り合う弦と糸約を結ぶ
神のステップがやつてくる
光のタッチの疾駆する乱舞
ひょうたん型の洞穴が歌いだす
アルペジオの魔法の上ではじける
たそがれの空の華奢な花火

メソソプラノ

風が表情を作る刹那の彫刻の
陰翳を目のあたりに いぶかしみ
憧れとなり 変幻する時空を追い
人間の女を憧れるよりも強く
無花果を夢幻の原野にさかせば
呼吸を抑えあまく厳しく曲折する
線と濃淡の綾は 呪文
恋となり果てた心魂 宙に渦をまく

指揮者

棒がけものを挑発する
けものは猛り 突進する
男は身を翻す
音のマントが翻る 歓声
しかしけものが眼をさますと
男はもう逃げられない
舞台の祭壇の上 嵐は
太古の供犠を見出す

化石

二条千河

科学館の壁際の
ショーケースに穿たれた円い穴に
子どもたちが次々と手を差し込んでいく
黒光りする太古の腸骨は冷ややかにざらついているらしい
かつてそこに臓物を取っていたはずのなだらかな窪みを
小さな手のひらが撫でます 何度も
すべてが化石になるわけではない ことを
子どもたちは知っているだろうか
その骨が纏っていた筋肉も血管も脂肪も皮膚も
土の中で あるいは何ものかの体内で
融けては凝り ほどけては結ばれ
地球上をめぐりめぐつて
今は私の一部になっている
そこに晒されている塊は
私になり損ねた残骸なのだ と
子どもたちは知らないだろう
容赦なく 執拗に
ひびの走つた表面をなぞる指先
私の腸骨も 肋骨も頭骨も大腿骨も
いつか彼らの一部になり損ねたら
透明な椀の中 こうして
黒光りするまで撫でまわされ続けるのか
「かせぎにさわつてみよう!
(やさしく、さわつてね)」
ようやく順番がめぐつてきた
ショーケースに穿たれた円い穴に
私はそろそろと手を差し込むと同時に
誰かの手が差し込まれてくる
まだ白く生温かな腸骨の感触はいかなものか
轟く臓物を取ったままのなだらかな窪みを
無数の手のひらが撫でます 何度も
(やさしく、さわつてね)



太鼓

町の広場の櫓の天辺で叩いていたら
櫓は浮遊して町を離れここはどこだ
雨雲の中で雷を鳴らしているのか
最高天で宇宙の鼓動を刻んでいるのか
盆踊りをおどる星座たち流星たち
撥は弧を描いて物語をかたりつづける
櫓が帰ってくる と 叢に虫がすだき
眠る子の夢の気配が集まつてきていた

尺八

一本道である
定規でひいた直線ではなく
自然に生まれる道である
地球にそつて円弧を描くのではなく
その上を季が旅する道
宇宙の法則を祖述するのではなく
真二つに宇宙を切り裂く道
時々あくびやくしゃみをする道

箏

天ノ川は正座して聴く
指に星が鳴る
光の屈折は
心の矛盾
矛と盾をむすぶ遺が
菜 それは天空の淵
せせらぎ 瀧 しづき
舟は正座をよこたえ

今回の執筆者

岩崎美弥子=岩手県盛岡市
小熊昭広=宮城県柴田郡
神泉薫=神奈川県相模原市
二条千河=北海道白老郡
平井達也=東京都練馬区
森山恵=東京都豊島区
池田康=愛知県名古屋